



関心から発信へ、
英語とICTで伝える

スキル・ワークショップの 小テストは4スキルに特化

「スキルワークショップでは、読む・聞く・書く・話すという4技能をコミュニケーション活動を通して鍛えるため、結果としてTOEICのスコアも上がります。英語力を身に付けるため、小テスト機能を使った課題が相当量出されますが、これはTOEICに準拠した内容。60を超すクラスの作問や自動採点、成績処理をmanaba上で行っています」。

外部教育機関に一部を業務委託して授業を行うにあたり、学部内の英語教員が内容を精査、監督。毎週ミーティングを行い、より良い教授法や小テストの内容についても話し合うといいます。

個人の興味から 専門分野へと深化

一方、プロジェクトの授業では、プロジェクト機能を多用。興味・関心を持った事柄についてリサーチした内容をアップして、共有すると共にコメント機能を使って互いにディスカッションも行います。場合によっては、グループ単位で活動した成果をアップすることもあるなど、その活用幅はかなり柔軟。学年が進むごとに、発表内容は個人的関心からアカデミックなものへと変容していくといいます。プロジェクトの手法についても、学年が上がるほどに、データの実証性を高めたり、ディスカッションやディベートの手法を取り入れたりと、より高度に。3回生ともなると、英語教員の他に、生命科学、薬学の教員と合同で授業を実施し、専門分野の発表に関する評価やアドバイスをしています。

環境を整え、 場を与えるという使命

「100%とまではいきませんが、教室にパソコンを持ち込んでいる受講生がほとんど。

中間、最終発表では、互いに発表し合った内容について授業内にフィードバックを書き込むなど、授業は学生主体で進みます。教員はあくまで、ファシリテートするだけ。やりなさいと指示するのではなく、コミュニケーションできる環境を整備することが大切です。ただ、manabaの機能を最大限使いこなしているとは言えないので、他にもできることが、まだまだあると思うんですよ」。

切り離せない英語と デジタル・メディア

国内の学会でさえ英語による発表が常識とされ、英語力の必然性に直面する機会が多いライフサイエンスの分野。さら

に最近では海外の学術誌などで、論文の発表に際して簡単なプレゼンテーション動画の提出を求められる機会も増えてきたのだとか。

「英語授業の中で、いかにICTを積極活用していくかということも、ますます重要になってきています。例えば、学生が自分の発表を動画で撮って、プロジェクト機能で簡単にアップできるようになったらうれしいですね。来期から、3回生の授業で、従来は紙ベースだったチェックテストをmanabaに移行することも検討しています。manabaも進化して欲しいですし、こちらにも、さらに効果的な活用法を追求していきたいですね」。

1 英語S(スキルワークショップ)の小テスト回答入力画面です。毎週ユニットごとに、発音・応答・聴解・文法・語法・語彙・読解についての自動採点小テストを出題しています。聴解の問題は、mp3ファイルを添付し、音声を聞いて答える設定になっています。

2 英語P(プロジェクト)のプロジェクト課題コレクション画面です。学生が提出した内容は履修生全員が閲覧・コメント可の設定となっているため、学生同士がお互いに提出物を読み合い、コメント機能でディスカッションをしています。

英語プログラムの 全授業にmanabaを

「ひとつ強調させていただきたいのは、お話しするのが私個人の活用事例ではないということ。『プロジェクト発信型英語プログラム』全体として、manabaを積極的に活用しているんです」と、まずは断りを入れた山中先生。生命科学部と薬学部が合同で実施している英語プログラムの概要から、順を追って説明してくれました。

プログラムのコアになるのは、学生の興味や関心を英語で発信する「プロジェ

クト」と、プロジェクトで使うための英語技能をブラッシュアップするための「スキル・ワークショップ」。学生はプロジェクトをやればやるほど英語力の足りなさを痛感してスキル・ワークショップに力を入れ、スキル・ワークショップで使える英語が身に付けば付くほど、プロジェクトで使いたいという意欲がわくといいます。つまり、モチベーションの相乗効果が機能しているということ。この両輪を軸に1回生から3回生まで段階的、継続的にプログラムが進行します。

授業規模

大規模

中規模

小規模

授業形態

講義

演習・実習

語学

manaba機能

小テスト

アンケート

レポート

プロジェクト

成績(採点結果)

掲示板

コンテンツ

コースニュース

出席